



Field Note

## 南洋群島に神社をたずねて



大坪 潤子 (COE研究員・RA)

南洋群島で日本統治下の神社(跡)の調査をするという話をいただいた時は正直躊躇した。サイパンやパラオは現在観光地として定着し、ロタやテニアンも人気が上昇中のようだけれど、自分は一生行くことがないと思っていた。過去に日本がそれらの地を統治し、アメリカ軍との間に壮絶な戦いがあり、現地の人々を巻き込んで多くの血が流されたことなどを考えると、訪れるにはあまりにも気分が重くなる場所だった。行くことがない、ではなく、行きたくない、が本音だったかもしれない。結局、その重さを抱えたまま、初めて南洋の地に足を踏み入れることにした。期間は2004年8月7日から16日、調査対象地は北マリアナ連邦マリアナ諸島のロタ島、テニアン島、サイパン島、パラオ諸島のバベルダオブ島(パラオ本島)、ペリリュー島、コロール島(調査順)である。

調査はその大部分を現地に住む日本人や博物館、H.P.O (Historical Preservation Office) スタッフの協力に負った。我々教員2名(中島三千男、富井正憲)と大学院生2名(サイモン・ジョン、大坪)の計4名は、まず現地でごうした協力者や機関とコンタクトをとり、資料を入手し、車を手配して神社(跡)をたずねた。中島は聞き取りと写真撮影(他の3名も各々記録写真撮影)、富井は現地の実測図作成、サイモンはそれらの補助と通訳、大坪は補助および記録を担当した。神社(跡)まで、はスムーズに辿り着いた所があれば、「見たことがある」という話をたよりに数時間探し回った所もある。調査は連日10時間を超え、出発前の準備不足を痛感することも幾度となくあったが、それでも現地の協力者のおかげで、多くの収穫を得ることができたと思う。

調査した約20社のほぼ3割は、「密林の中に埋もれていた」という印象がある。もっとも我々が訪れたのは1年で最も植物が繁茂する時期だそうで、またテニアンのように月に2回も北マリアナ連邦政府の予算で草刈りや清掃がなされているという場所でも、台風のためにそれが延期されていた。訪れる時期によっては印象も作業内容もかなり違っていただろうが、とにかく今回は、現地の日

本人や博物館関係者の先導に従って、草を払い、枝をかき分け、蔓を引き抜いて、ようやく鳥居や燈籠の痕跡から拝殿や本殿の跡まで辿りつくといった調子。鳥居や燈籠などは倒れて草に埋もれていることもあり、神経を張り詰めてこれらを探す(帰国後も癖がついていて、ふと電柱などを見るとドキっとした)。それでもだんだん目が慣れるにつれ、そこにかつて参道が続き、開けた眺望を持つ本殿に続いていたさまが想像できるようになった(写真1)。

その他を大別すると、今でも人々が集う場所として宗教(キリスト教)や娯楽の場として生活の中に機能している神社跡、そして、整地され、ほとんど痕跡を留めない神社跡地があった。例えばロタ神社は巨大な洞窟(Tonga Cave)の前に位置し、現在は洞窟を抱く崖の上に十字架がそびえ、本殿跡にはキリスト像が安置され、拝殿跡は集会所になっている。洞窟は古くから台風時の避難場所として利用されてきたもので、日本海軍は野戦病院として使用した。テニアンの和泉神社は、本殿跡にカトリックの聖人イシドロ農夫(スペインの農業守護聖人)を祀り、年に1度、近隣から数百人が集まって、朝から盛大なフェスティバルが行われるという(サン・イシドロ祭)。前者は明らかに神社が建てられる遙か前から人々が集まる機能を持ってきた場であって、後者は神社以前を確認できていないが、少なくとも単に境内地や建物を利用したというだけでなく、聖人を祀るにもふさわしく、また人々が集いやすい条件を持つ場ということなのだろう。ほかに、最初に調査したロタの大山祇神社(別名マニラ神社、調査時は傍でパーベキューパーティーが行われていた)やサイパンの八幡神社は、自然の岩石がいかにも「磐座」や「聖域」を思わせ、八幡神社そばに住むおじいさんが「これほんとの話」と教えてくれた、「家の前を通って参拝し、どこからか現れた白馬に乗って帰る女性のイリュージョン」など、さもありません、の場であった(写真2、写真3)。

我々が「Shinto shrine」を探していると言うと、「知

っている」と思いがけない所に案内されることもあった。パラオのバベルダオブ島では、観光地として有名なガラスマオの滝（には行ってないが）の近くに清流があって、この川上にshrineがある、と近くの集落の若い男性が言う。水は冷たく澄んでいて、そう深くはないのだが黒光りする川底に足を滑らせそうになりながら溯ると、果たして上流の木々の根元に小さな水天宮の祠があった。その祠の存在が奇妙なほど自然なものに思われ、自分は今どこにいるのだろうと一瞬戸惑ったが、直後にスクールでずぶ濡れになり、ああここはやはり南洋なのだとかみしめつつ帰路の山道を登った。山中にはかつてボーキサイトの運送に使ったトロッコのレールがところどころに姿を見せている。続いて「もう一つ知っている」と言われて行った場所は小さな山の麓で、こちらはすぐに鳥居の基礎が見つかった。林の中を15分ほど登っていくと急に視界が開け、広々とした草原の頂上に拝殿と本殿の基礎が残っている。周囲の海、山、村落を見渡せる一等地である。この神社は事前の調査資料に見当たらず、名称も不明であるが、現在ここに神社跡があるだけでほかに何の記録も、新しい利用も無いのがひどく不思議だった。

今回調査したのはいずれも、現地での何らかの情報に基づいて辿りついた跡地であり、我々は発見でなく確認の作業をしたに過ぎないのだが、一方で、当時の資料を集め現状を把握し記録に留めること、そこから南洋の神社をめぐる景観の変化を読み解こうとすることの意義は軽くないだろう。

さて出発前の重い気分は、調査中に戸惑いが加わって、帰国後も整理がつかないでいる。神社跡以外にも調査中に見ることのできた、日本統治の痕跡や戦跡（現在も使われている建物や日本語、スーサイドクリフ、バンザイクリフ、原爆搭載場、海軍航空隊司令部など）。これらを前に語ってくれたのは現地の日本人や博物館などのスタッフだった。彼らは史跡としてこれらを伝え、あるいは調査・保存を行いたいと言っていたが、話の深いところまでは汲み取れなかったし、島で暮らす他の人々はこれらに、ひいては日本に（観光としての価値を別として）どのような感情を抱いているのか。今回聞きとりは僅かしか行えず、もし多く行ったところまで話してくれ、解釈しうるものか判らないが、答え慣れた口調で「日本時代は良かった」と語られても素直に信じる気にはなれなかった。一方現地の日本人によれば、往々にして被害証言の方が期待されるので、フィクションを

加えて語ってしまう老人もいるとのこと。今回に限らず、聞きとりの難しさを考えさせられる問題である。依然観光で行く気にはなれないけれど、まずは先入観なしに、南洋と向き合ってみようと思う。



写真1 テニアン島アシガー NKK神社か



写真2 ロタ島マニラ高地 大山祇神社



写真3 サイパン島東村 八幡神社